

千刈狸の呟き

アクセルとブレーキを踏み間違えたり、逆走で交通事故を起こす高齢者が増えている。長距離のマイカー通勤を長く続けている身には周りの心配声がかまびすしい。運転が苦なら負担軽減のため勤務形態を変えるなどしてもいい年齢だが、なかなかやめられない。フロントガラスに迫った道端の草花や建造物が、真横にスーッと移動した瞬間には後方に飛び去っている。この座っているだけで得られるパノラマと浮遊感は、動体感覚が低下した身には上等な慰めだ。同じ道、同じ景色を見ていて飽きるわけでもなく、むしろホッとす。

こんな毎日の通勤だが、昨年の秋、気になったことがある。日本の秋の風物詩ともいえる道端や野原のススキが元気がなく衰退しているのである。ススキはその薄紫の出穂で夏の終わりをそっと気づかせてくれる奥ゆかしい花だ。秋の盛りには道端に生い茂った白い穂が、前を走る車の風圧に身をゆだねるようにしなやかに波打つ。時速60kmで過ぎ去る瞬時に垣間見るその表情は、折れまいと必死で実にけなげだ。こんな見慣れた風景が変わった。

それはススキの生息地を乗っ取る草花が現れたからだ。この花は先端が三角形の派手な黄色で、大柄で群生するので半グレのごとく目立ち、10月に入るといつの間にかススキを押ししのけその場の主役として咲き誇る。しかし、晩秋には無残に変色し朽ち果ててしまう。かわいそうなのは養分を吸い取られ道連れにされるススキで、冬を待たずに枯れススキと化する。

この花の名は背高泡立草(セイタカアワダチソウ)といい、アメリカ原産の外来種でススキとライバル関係にあることがわかった。戦後、アメリカ軍の輸人物資に付いた種子で拡散したようだ。環境適応性が高く、昭和40年代以降に主に西日本で大繁殖した。やがてこの花が秋田にも侵入し、ススキが駆逐されていく様子を通勤の車窓から気づいた次第である。

忌々しい花だが、ただ野放図に増えるだけではないところがせめてもの救いだ。アレロパシー効果といって、根から出る毒成分が周りの植物を弱らせ一時はその場を独占するも、この毒が自身にも作用し一定期間で消退するという。このため、一か所に長く定着できないらしい。ススキはこの機を逃さず再び晩秋の草花の主役に復活してほしい。ちょっと驚いたのは、ススキが逆にアメリカでは外来種として繁殖している地域もあるということだ。アメリカの

～ ススキと背高泡立草 ～

外来種狸

車通勤者はどう思っているのだろう。

この花に乗っ取られるススキの哀れな姿は忍びないが、しよせん車窓から見る美観レベルの話で、自分の生活が脅かされるわけではない。しかし動物となれば別だ。侵略的外来種として、魚類ではブラックバスやブルーギル、動物ではアライグマやカミツキガメなどがいる。生態系を乱し交配による遺伝子汚染、人への危害、農作物被害などが多数報告されている。それゆえ、外来種の多くは特定外来生物として飼ったり野に放すなどの行為が法律で禁止されている。

不見識な物言いかもしれないが、外国人労働者や移民も外来種といえる。法治国家ではその国の移民法に基づいて入国、居住、労働が許可される。人道的配慮はあるにせよ、その本音は労働力不足を補うことなので、メリットがあるうちは受け入れるが不利になれば排斥する、というエゴがいずれは表面化する。EUとくにドイツなどでは中東やアフリカからの移民難民の急激な増加が社会問題化しているが、日本にとっても対岸の火事ではない。

人間に寄生して移動する微生物、たとえば今パンデミックになっている中国武漢発のコロナウイルスも外来種だが、可視化できず捉えどころがなく不気味である。ガラパゴスのような孤島でもないかぎり入国阻止は難しそうだ。

一般に、外来種といわれるものは人間が作った法律や国境に翻弄され、規制され、時には嫌悪される運命にある。しかし淘汰を免れ、その国土に適応し同種と交雑し、変異し、何世紀もの長い時が過ぎればもはや外来種ではなくなる。これはすべての生物に共通して言えることで、今を生きるわれわれは脈々と命を繋ぐこの生物たちの歴史のほんの一断面を見ているに過ぎない。

そもそも日本人といっても、その祖先は古代に南方やユーラシア大陸から移動して日本列島に住み着いたものである。その頃は国という概念がないから外来種という概念もない。さらに言えば、われわれが国土と呼んでいる陸地そのものも、太古の昔に地球の地殻変動でくっついたり離れたりして今に至っているだけである。こう考えると、国というものを盾に新たに進入してきた生物を外来種と決めつけてとやかく言う筋合いのものではないのかもしれない。ずいぶん飛躍してしまったが、しかし、それでもススキには負けてほしくない。